

あそ 2
2021



山巡り 須賀忠男



日光白根山

日光白根山 2578m
丸沼高原より岩場の頂上に
登頂する。
360度の展望
中禅寺湖と男体山が
すぐ近くにある。
10月の秋晴れ。
気分最高です。

二月集

新春詠「貳」 ほか 佐藤喜孝

睦び月一步も家を出でず濟む

青空に枝さしのべて梅ふふむ

永き日を石を動かし昏にけり

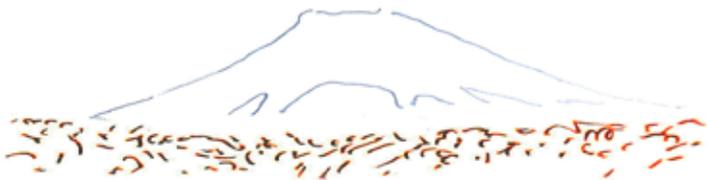
京にはおよそ二千と寺の春

夏星や昭和新山一字の如

新盆や佳人といふて仔細なし

須らく俳句はあそび瓢の笛

つかの間の雪やどりかも寢正月



しぐれ

篠田 純子

エンタシスの柱しぐるる丸の内
瑠璃あげはの死の美しきかな冬早暁
踏切遺構の錆へ時雨や銀座なる
冬季コロナ老人性鬱併発す
天赦日に御朱印受くる冬日向



「新社員」抄（五）

篠田 大佳

白いコートの彼女は傘もささずに歩いてた
春きざす少女の手には缶珈琲
受験子や同伴の母よく喋り
受験終へ寝息の深き少女たち
水槽に蛙ゆつくり浸かりけり



冬ぬくし

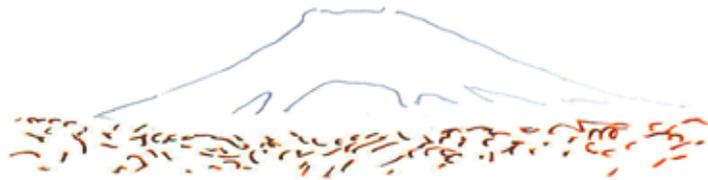
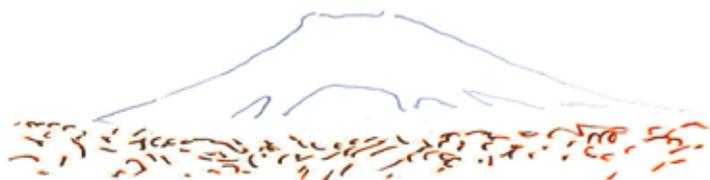
須賀 敏子

駅ビルに大きな書店冬ぬくし
冬の旅終へてホームの狭山そば
風吹けば会話始まる枯芒
下野は父の故郷那須風
少々の苦味を残し金柑ジャム
金柑も柚子にも与へ寒ごやし
ベンチでもあっちとこっち日脚伸ぶ
また逢はん術なく過ぎて年の果

初冬

田中 藤穂

シャツを干し隅の枯草抜きすてる
大輪に冬薔薇の咲きコロナ増ゆ
冬あたたか蹲踞の水猫の呑む
チャー飯に茸たっぷり日曜日
マスクして来年の日記買ひにゆく



極月

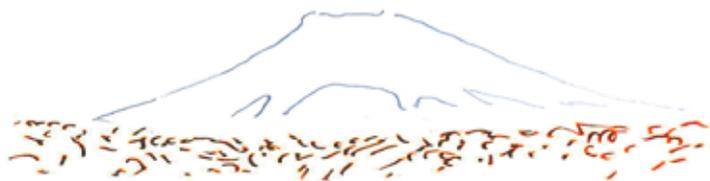
長崎 桂子

極月やリユックサクサクに旅恋し
冬うらら楽器のみなる会に風
小春日のちりめん山椒昼餉かな
初雪やゴミ収集車の労苦に
不安解きたし極月の美術館
浮き沈む柚子湯に遊び長引きて
煮花を含み頷く鯽の鍋
晴れて山茶花の紅の気の漂ふ

十二月

森 なほ子

十二月修道院の掲示板
枯葉舞ふ沈黙深き修道院
夕月の淡く色づく冬木の芽
紙屑の山とも芙蓉枯葉かな
新築の窓みな灯り聖夜更く
紅葉山スマホに容れて持ち帰る
三夜目の「ゴッドファーザー」小晦日
古暦右下隅にたどりつく



十二月

赤座典子

「イマジン」よ割れし目鏡よ開戦日

時々遣り過す術寒玉子

抑へゐる旅への焦がれ竜の玉

床の間に蠟梅やをら羽搏ける

諍ひは入口までの小晦日



星降る

秋川泉

息をのむ冴ゆる空より星の降る

ふたご座を飛び出す光冴えわたる

頬にささる空気きりきり流れ星

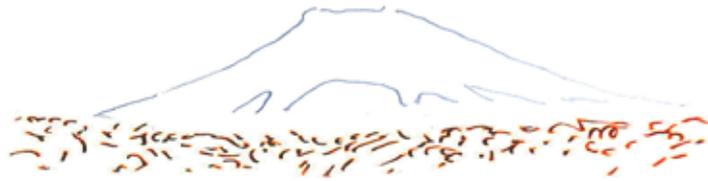
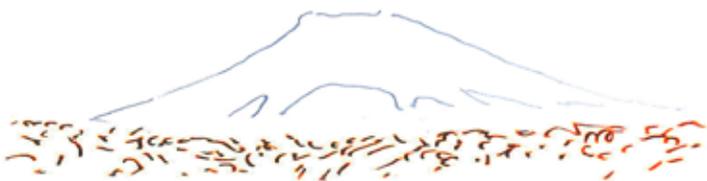
冴え渡る広き地平に星の降る

せはしなく自転車を漕ぐ冬の月

大声やふたり乗りする息白し

柚子を食ふ日当る土手に子が並び

昨日の喧騒失せて山眠る



野鳥

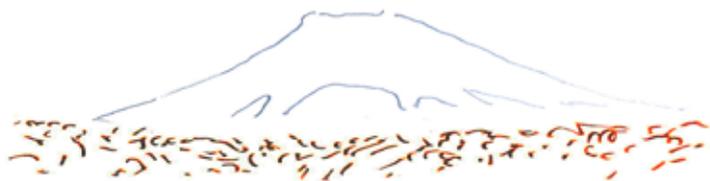
大日向幸江

小春日の固茹玉子立ててみる
親知らぬ兄妹猫や日向ぼこ
マスク白吐く息白し霜の朝
どつしりと出雲の神や鏡餅
晦や年神の座浄めけり
暗闇を抜けて迎へし初日の出
海月にも大脳小脳前頭葉
屋根職人ふるまふ為の栗ご飯

年末年始

七郎衛門吉保

ジャムつくり一つ残して冬至の湯
夕陽受く百舌の胸毛の若冲画
行く年に自肅号令響きをり
筆始十年日記の三冊目
独楽回す技を忘れぬ昭和の子
願ひごとマスクに籠る初詣
朱の神幣願ひは一つ初詣
都邑では昔話の焚火かな



焔収集

初み空鴉と妻は顔なじみ 佐藤 喜孝

妻の肺メスが入るも冬董 七郎衛門吉保

脳内に未開の奥地日向ぼこ 篠田 純子

配達員表情のなく初御空 篠田 大佳

ささやかな旅の始まり石路の花 須賀 敏子

追ひつけぬ息子の歩調冬の坂 田中 藤穂

晩秋の多彩な湖畔水鏡 長崎 桂子

馬追は精密機械かもしれぬ 森 なほ子

点滴の跡薄らぎぬ小六月 赤座 典子

猫道をたどりて角に茶の木咲く 秋川 泉

兄逝きてぼつと寒さの日々に増え 七郎衛門吉保

冬ゆやけ線路忽ち失せにけり 篠田 大佳

冬の宿姉の語りし父母のこと 須賀 敏子

一日に食事は三度冬立てり 田中 藤穂

冬に入る貨車を利用の赤提灯 長崎 桂子

投げつけし言葉が淋しがる夜寒 森 なほ子

ひとしきり裸木揺らす鳥細身 赤座 典子

蓋ひらきぱつと広がる林檎の香 秋川 泉

喜孝抄



鐵柱に草の生えたる植物園

佐藤喜孝

作者の題は「雑詠」、漢字源に「特定の題によらず折にふれていろいろな事物や季節などをよんだ詩歌」とある。とするならば秋・秋・秋・春・夏・春・夏・夏・無季と並んだ句もそこから外れてはいない。他方で他の作者の全七十四句は秋か冬。十月末までとして十二月号という季節から外れていない。そこに春・夏の句を含めることに馴染みにくい感があり、そこで無季の句を選んだ。(吉保)

窓を開け句会再開青みかん

須賀敏子

昨年の阿佐ヶ谷句会は二月・七月・十月の三回に終わった。その十月句会の「時々換気をするように！」との会場の指導を取り込み、「窓を開け句会再会秋の昼」と即席で詠まれ、綾子さんが選句された一句。互選後に「下五は直截すぎて面白くないので他の言葉に置き変えては」と喜孝さんから。机上にあったおやつ「あをみかん」ではと吉保。其れいただきますと敏子さん。(吉保)

秋麗 コロナの町は人少な

田中藤穂

世界規模の感染症危機、二年目に突入し一層先の見えない状況に、俳句界もどのように対応していくのか。朝日俳壇紙上に角谷昌子の「感染症の時代を越えて」との俳句時評が載った。時代を記録する媒体としての、俳句の役割と効果を考えると、しっかりと詠んでおくことが重要と思われる。危機意識から、ともするとネガティブ傾向が強まるが、秋麗と詠む感性も大切に思える。(吉保)

枝をゆく髪切虫に月今宵

森なほ子

カミキリムシは世界に二万種が生息し、日本だけでも七百種を越えるとのこと。植物繊維質を食する大顎があり、強い切断力發揮する。日本髪などの元結を切るほどから、髪切虫との説もある。害虫と言われながらも、長く強い触角・派手な斑点模様・鮮烈な色使い・キーキーと鳴く声など、多様に自分の存在を示している。夜行性の髪切虫が出で、今宵の月を楽しんでいるのかも。(吉保)

タクシーはひかりにきえぬ駅は冴ゆ

篠田大佳

幸か不幸か、世界中の行動規制発令により、動く人と車が減少し、かの中国ですら一時は空が綺麗になった、との情報もある程。藤穂さんの句と同様に、町は人少な車少なで、東京の空も例外でなく、冴えて綺麗に見える。今日の景色や世相を記録した一句に思える。この状況の行く末は、世界

中の誰もが見えていない。歴史的評価という長い目となりそう。なお一層の作句を期待。(吉保)

薬局の柱の艶に孫太郎蟲

佐藤喜孝

孫太郎虫という名前が面白くて調べました。ウィキペディアに「ヘビトンボの幼虫。子供の疳に効く民間薬となる。水中に棲み、体長は五センチ位」とあり、画像も載っていました。その昆虫が薬局のてらでらした柱に張り付いている。昭和を感じさせる風景です。昭和といえば、薬屋さんの前には、製薬会社のマスコットの小象が、必ず置かれていて、頭をポンポンと叩いて、通り過ぎていました。(典子)

蟬とらへ猫が「だうだ！」と見せに来る

秋川 泉

小さくて、動くものを狙っている猫の、真剣な様子は普段と全然違います。それほどに集中した成果なので、褒めてもらいたく見せに来るのは、よく分かります。泉さんの猫の句を拝見する度に、子供の頃の飼い猫や、清瀬に住んでからは、日曜日に、野良猫が三匹で、よく遊びに来たことなど、懐かしく思い出しています。(典子)

テイラーのとなりバーバー秋の暮

篠田純子

テイラーとバーバーという言葉。突然、昔の街の風景を思い出しました。我が家の向かいの通りに、仕立屋さんと床屋さんが、まさに隣り合っていました。純子さんの句では、夕暮れ時に、中折れ帽の紳士が、通りを歩いている優雅な風景が浮かびます。早稲田の学生さんが行き交っていた、あの通りのお店は、今はどうなっているでしょうか、確かめに行ってみたいです。(典子)

太古から海の残り香山眠る

大日向幸江

人類など出現していない大昔に、広がった海が、様々な現象で、海岸や島々や山々等に変化し、今もその形を保っているものがある。幸江さんの詠まれた山は、昔々の海の香りを今も留めて、悠然と存在している。何が起こるか予想のつかない、不安な日々であっても、どっしりと構えている。幸江さんはそう思われたのでしょうか。(典子)

ゆるり行くちらほら淡い秋の色

長崎桂子

紅葉狩りは、桜ほどではないにしても、行くタイミングにより、見られる景色が違ってきます。

作者は、まだ盛りではないけれど、ゆつくりと過ごせる機会に出かけられました。全体の淡い色に、所々朱色が映える景色を満喫されました。ゆるりと ちらほら という リズムが、心地良く伝わってきます。(典子)

岳沢に影一つなく秋気澄む

七郎衛門吉保

岳沢は前穂高岳や奥穂高岳への登山基地。澄んだ秋の気を「影一つなく」と詠んだ。岳沢を知らぬ者にも、爽やかな気を感じさせる。知る者にはなほさらである。(喜孝)

旗日と言ふ人と出掛ける文化の日

赤座典子

「旗日」といふ言葉を聞かなくなって久しい。昔は祝日には家々で旗を立てたものである。門前には旗竿をさす金具が備えられていた。いつのまにか旗日に旗を見なくなった。そんな旗日という死語のやうな言葉を無意識に使う年代の人とお出かけをすると。アイロニーが効いた「文化の日」の面白い。文化の日は晴率が高いらしい。(喜孝)



佐藤喜孝

篠田大佳

ビル陰のをんな三人冬うらら
天狼や桃田賢斗の泣きぼくろ
はじまらぬ五輪の褪せし古暦

○なかなか屈折した表現である。冬のビル陰はビル風なども加はり一段と寒い場所。と思ふのだがそこにをんなが三人立つてゐる。そして「冬うらら」といふのである。作者の計算された情景と思ふ。魅力のある違和感である。

○桃田賢斗と聞くともう一人前園真聖の名が浮かぶ。二人とも事情は違ふが人生のどん底から立ち上がって今があるスポーツマン。テレビで上辺だけしか知らぬが、リスペクトしてゐる。

「天狼」はシリウス星の漢名。冬の季語でもある。大佳さんほどのやうな思ひで桃田賢斗選手を詠まれたのかは知らぬが、「泣きぼくろ」で生々しく桃田賢斗が立ち上がる。天に輝く星に桃田賢

斗を重ねた。オリンピックが楽しみだ。

○前句のところで「オリンピックが楽しみ」と書いた。コロナで一年先延ばし、今年こそと楽しみにしてゐたがコロナ以外にも障害があつて開催が危ぶまれてゐる。暦をめくり戻せば昭和十五年の東京オリンピックも返上してゐる。オリンピックと日本は相性が悪いのだらうか。

須賀敏子

じき五年これから五年日記買ふ

豚汁と決めて足早冬至の日

小晦日雲の動きの速きこと

○「五年日記」を買つたのであらう。時計で計れば一年は一年、同じでも人の受け止め方は違ふ。五年といふゴールは遙か向かうに霞んで見えるが、一方で敏子さんは「じき五年」とも思ふ。複雑な思ひで日記を求めた。私は日記をつけたことがない。妻は細かい字でつけてゐた。しばらく考へたが見ないで奥に仕舞つた。

○冬至ともなれば日の暮れるのも早い。夕餉の献立には温まる豚汁と決まると、主婦は忙しい。「足早」が慌ただしさを伝える。「冬至の日」と「日」を入れた。さういふ表記の俳句が無い訳ではないが「日」は蛇足とおもふ。

○「小晦日」と「雲の動きの速きこと」。何も関わりがないが小晦日の人々の様子を詠まれた。寒々とした師走の町が目に見えぬ。

田中藤穂

冬日和ヘルパーさんは自転車で

柿落葉桜落葉の坂下る

コロナ増え人通りなき町寒し

○轟夕紀子が唱ふ「お使ひは自転車に乗つて」といふ歌が頭に浮かんだ。わたしは単純な頭をしてゐる。きつとこの句の持つてゐる明るさが即座に連想させたのだらう。「自転車で」と軽く留めたところが気に入つてゐる。「お使ひは自転車に乗つて」は戦中の「ハナ子さん」といふ映画の主題歌ださうだ。

○柿落葉も桜落葉も紅葉つるものもあり美しい。そんな落葉の敷かれた坂。何気ない表現だが馴染まれた坂への挨拶でもある。

○コロナ騒ぎで町の人通りが寂れた。コロナは何時かは治まるのであらう。治まつた後に振り返るとこの時代に作られた俳句も貴重な記録になることだらう。

長崎桂子

歳末に整骨通院の不覚
思ひ出す「宮重大根」祖母の味
帽子とび路傍を乱す嚴冬来

○どうされたのだらう。転ばれたのか、心配である。「整骨通院」は端折りすぎ。字数も調べては。一例に「整骨に通ふは不覚年の暮」。

○「宮重大根」は初めて聞く。「みやしげ大根」は尾張大根を代表する青首大根。青首の部分で輪切りにし皮をむき生で塩を付け食べる習慣があるくらい強い甘さが特徴とあった。戦後生産されなくなつたが、平成に入り「宮重大根純種子保存会」により復活。桂子さんもこの復活した大根を味あふとともに祖母のことを懐かしく思ひ出された。

○風に煽られて帽子が飛んだ。慌てて追ひかけるも逃げ足が速い。他の人が捕まえてくれたかもしれぬ。そんな光景を「路傍を乱す」といはれたのか、解釈にあまり自信はない。

森なほ子

山茶花や妹は紅姉は白
庭園や野菊のほかは草も無く
川音の染みておでんの味の佳し

○いい作品ですね。妹が紅色が好きで姉は白が好きだといふ事でもいいが、「妹は紅、姉は白」なのです。わたしもその通りだなあと同感。そして美人姉妹であらうと確信した。

○野菊は辞書では野に咲く菊、または嫁菜のこととある。庭園にはすべて野菊で埋め尽くされてゐるらしい。なんとも不思議な句である。

○「川音の染みて」は川沿ひのおでん屋といふことか。最近コンビニおでんも人気があるのでコンビニエンスストアかも知れない。屋台といふこともあるかもしれない。おでんは冬の季語。おでんに川の音が染み込むのはどんなお店だったのだらう。さう細かく読むより川の近くでおでんを頂いたのだらう。寒い夜のおでんは応へられない。

大日向幸江

群舞する野鳥の姿山眠る
窓の外カナリア色の暖かさ
寒気団来る予想図や大噓

○野鳥の動と冬山の静を並べそれぞれの特徴を捉え詠まれた。この句で気になるところが二点ある。一つは「野鳥」。「山眠る」とあるので「野鳥」とまで云はなくともよい。それより鳥の種類を定めるのも一法。もひとつは「姿」。鳥の様子を伝へやうとしてゐるがあまり見えてこない。

○わたしはほとんど家に居る。買い物や投函に仕方なく家を出る。日がな一日「窓も外」を見るだけで一日がをはる。この句の「窓の外」もさういふ「窓の外」かも知れない。夕映えであらうか。その色をカナリアの羽の色に譬えた。このやうな佳句が生まれた時の作者の喜び。俳句を続けられるエネルギーになる。

○西高東低であらうか、冬の天気図を見ただけで大噓をしたと。をかしみのある一句。「天気図」とせず「予想図」とされたところが計算されてゐる。「寒気団」が季語ではなく「噓」が季語。

赤座典子

白菜を漬けて一日の安堵かな
羽生の舞辻井の「月光」室の花
冬木立果てに顔なき地藏かな

○昔は（もう昔と云つてよいだらう）白菜は縄で括られて売られてゐた。今は四分の一に切り分けラップに包まれ店頭に並んでゐる。典子さんは昔どの家でもやってゐたやうに大量の白菜を漬けた。冬支度の一仕事。「安堵かな」とホッとするほどの作業であつたのだ。

○羽生は羽生結弦選手、辻井はピアノストの辻井伸行さんのことであらう。結弦選手とわざと選手と書いた。典子さんにはスポーツ選手でなく芸術家羽生なのである。羽生と辻井のこの様な出会ひがあつたのかは知らぬが、あつたなら夢の時である。あはあはと流れるピアノの調べ。その流れに身を任せて舞ふスケーター。まさに氷上の室の花である。以前に、

白面の羽生結弦や花辛夷 森 なほ子

がある。典子さん・なほ子さんにとって彼はスケート選手ではなく、羽生結弦なのである。

○作者と距離をおいて古い地藏さまがある。なぜ冬木立の果てなのであらうか。考へたが「冬木立」である作者の意図がつかめなかつた。

絵の中のとどろき渡る噓かな
しゃぶしゃぶの誕生会は小ぢんまり

G 1 の 夢 遠 の き て 冬 の 月

○ちかごろの「はしたて集」は難解句が増えてきた印象。難解句ではなく意欲句と云ふべきかも知れない。筆が止まることたびたびである。この句も噓をしてゐる人の絵なのだらうか。あまりに上手に描かれてゐて噓が聞こえてくる、といふ句意に読める。さう読んで良いのか不安。

○親しい人でしゃぶしゃぶ鍋を囲んでの誕生会。いつもより小規模での誕生会、きつとコロナの影響なのであらう。

○「G1」を「GI」と読んで回り道をした。校正の段階で複数の人に指摘され、競馬の最高格付けのレースと知った。私のアンテナが全く「現在」に向いてゐないとつくづく知った。ごひいきの競走馬が負けたらしい。馬券を買つてゐたかも知れぬ。空を仰げば寒々とし月が上がつてゐた。

七郎衛門吉保

定住し漂泊せよと冬ざるる

咳なくして緊急事態の寂寞

等身の動くガンダム冬ぬくし

○俳句の短さを利点にもできるし、欠点にもなる。妻がまた俳句を始めてゐない頃、創作中の句を見せてどのやうな情景かと尋ねた。意味が通じなければ日本語としてどこかに欠陥があると創作の参考にした。金子兜太が「定住漂泊」といふことを云はれた。この知識がない者が読むとわかりにくい。一案として前書で一言加へるか、「定住漂泊」と鍵かっここで句中に表記すればと思考した。「定住漂泊」と「定住し漂泊せよ」とは意味がだいぶ違ふ。ちよつと妻の若き日の立場になつての意見である。

○間違へて読んでゐるかとおもふが、コロナの世界大恐慌の事を詠んだ。コロナ以前のマスクは咳のイメージがあつた。今はマスクをしてゐても咳をしてゐる人を町で見かけない。静かである。といふ様なことを云はれたのか。「緊急事態」といふ時事語を俳句に取り込むのは難度が高い。

○ネットニュースで知り見た。ガンダムそのものには全く無知だが、ガンダムを愛する心の熱い人がある。さういふガンダムの世界に改めて興味を持った。「等身」ではなく「実物大」ではないか。「等身大」では人の背丈大と云ふことになつてしまふ。



港区の坂

篠田純子

転坂は、実際に港区赤坂に在る坂で、微妙な地面の歪みが転倒を誘発する。歩いてみると本当に気持ち悪い歪みである。なぜ平らに舗装しないのだろう。
牛鳴坂はあまりの急勾配に、牛も鳴いたと言おう。
自転車でスイスイ行き、下り坂かと思うと突然階段が現れて、行きあぐねたこともあった。
あを会員と、地域バスで仙台坂を上り、ガマ池を吟行した日が懐かしい。

坂の途中

田中藤穂

私の家は坂の途中である。門を出て右を見ると駒込病院の灯がよく見える。駒込病院は不忍通をはさんで向いの坂を上る途中にある。この辺りは本当に坂だらけ。蒲団屋のおじいさんはまだ手で曳く車の時代だったので、どの坂が一番きつかったとか玄關でよく話していたものだ。つた。
昔は四時になると籠を提げて子供の手を引いてお使いに行つた。若い頃は少しも苦にならなかつたのだが、九十四才に近い今は、この道が坂でなかつたらなあと思つた中で思っている。

住いの周辺の坂

長崎桂子

家を出て南へ百二十歩の川への道は緩い坂道です。其処から更に八百歩余りでスイパーですが、駐車場を通り抜けて入口までは、かなりの急坂で三千歩ほどを上り店の玄關で店内に入ります。
帰りは八百歩余りの川までの道はこの土地が低くて中程度の坂道となります。故に買物に出る時はリュックサックでハイキングに行く気分で坂に対応して日常の買物をして居ります。

馬坂

秋川 泉

里の山寺は、四方が山林に囲まれていて高台にあつた。すぐ目の前は平坦でそこから急峻な坂道が下つていた。「馬坂」は百メートル位の坂。赤褐色の風化した火山灰の赤土で雨が降ると土が流れるので、父は坂の一番上から何本かの丸太や孟宗竹を坂に埋めて防いでいた。幅五メートルあるかないかの馬坂。しかしそれは公道であつた。横浜市は寺の敷地三分の二を削り取り、平成十八年春「横浜市環状四号線」にした。立派な公道のその道はやはりかなりの坂である。必死に土が流れないよう土木工事をした父が、この寺とこの公道の今を何と思うかと考えるたび胸が痛む。

小笠原の坂

佐藤喜孝

四十歳ぐらゐの時、頼まれて表員の講師になった。人の前に立つことはなかったので随分緊張したものだ。教室に来られた方は様々な特技をお持ちの個性あふれた教室であった。この表員教室で教へるまでは自分の仕事を楽しいと思つたことがあまりなかった。しかし、生徒さんの楽しさうに作つてをられるのを手伝つてゐる内に、仕事に向き合ふ姿勢が少しずつ變つて行つた。ありがたいことであつた。

教室の帰りは二十二時近くになる。阿佐ヶ谷駅から中野駅。ここでバスに乗り換へ『堀越学園前』下車。家までは上り坂である。妻は雨の日も迎へに来て荷物を持ってくれた。バスより早く着いていればバス停に居るが、遅れることもある。坂の上に影絵になつた人影が現はれるとすぐ妻だとわかる。オーキヤクなのである。いつ頃からさうなつたのだらう。私は生来オーキヤクである。妻は立つてゐる私の膝に拳を入れ笑つたものだ。その頃の妻はミニスカートをはいてゐて膝に隙間はなかつた。それが二人してオーキヤクになつてしまつた。亭主の好きな赤烏帽子かも知れぬ。

この坂は小学校への通学路でもあつた。越境通学だつたので帰りの生徒は少なく女子と二人で歸つた。何を話しながらだつたのか全く記憶にない。ネットでは「小笠原坂」と表記されてゐるが、「の」が入らないと

別の坂のやうである。

佐藤恭子遺句抄4

初明り鴉の黒の極まれり

高熱を出して椿の蕾かな

面白くだるまの赤の燃え起ちて

沈丁花右脳の角に居すはるか

二人してみかんとバナナむきながら



朝寒や茶柱のんでしまひけり

風花の真ん中に居る浄瑠璃寺

秋の蝶動き出したる遠嶺かな

夜桜や血気に逸る鴉かな

秋の蝶雨の中へととけ出しぬ

ふとこころ

山眠る育てしものをふとこころに
雪をんな内懐に寒玉子
ふところに風あつまりりし天の川
廃校のふところさくら一列に
懐に春風入れて言ふことなし
春の雪とまどひ土のふところに
まんまるの月のかなしみふところに
ふところの瀬音冷えて芽木暮るる
早苗植う山懐の二人かな

太棹

太棹をくどく厚撥星冴ゆる

ふとぶと

金盞花荦ふとぶとと海辺の地

舟遊

顔も手も翡翠に染めて舟遊

船歌

船頭の船歌洩し岩つつじ

船旅

船旅をしたしとおもふチューリップ
穏やかにナイル船旅冬温し

船旅は越前水母日本海

計報

後藤 志づ

田中 藤穂

堀内 一郎

堀内 一郎

鎌倉喜久恵

長崎 桂子

芝 尚子

渡邊 友七

赤座 典子

井上 石動

田中 藤穂

森山のりこ

鈴木多枝子

竹内 弘子

須賀 敏子

須賀 敏子

計報欄ちらと横眼に聖五月
剥がされさうな計報二月の掲示板
あつけなき計報ふたつや暮の春
読み返す計報フアックス洗ひ髪
立て込んで計報の届く秋の昼
椿落つ唐突にきく師の計報
計報なき町つつがなく夏送る
空半分鯖雲のあり計報あり
木枯一号計報一号もてきたる
金柑を焦してしまふ計報来し
計報また大輪椿紅曇る

計報欄になつかしき人朴の花
梶子の一輪咲いて友計報

父母

寒椿高き囲ひの父母の墓
亡き父母や木々に重たき雪の黙
亡き父母の来て左右に坐すところろ汁
父母眠る山河やさしく真夏日に
子鴉に父母ならぶさくらの実
暑に耐へて父母より多き齡生く
父母のこと鱒の小骨を抜きながら
父母に白百合の供花香を炷く
虫浄土父母の声かと耳すます

後藤 志づ

木村茂登子

堀内 一郎

赤座 典子

田中 藤穂

須賀 敏子

堀内 一郎

田中 藤穂

木村茂登子

大日向幸江

田中 藤穂

田中 藤穂

七郎衛門吉保

鈴木多枝子

渡邊 友七

田中 藤穂

芝宮須磨子

佐藤 恭子

田中 藤穂

竹内 弘子

長崎 桂子

渡邊 友七

木犀や父母の戒名相寄りて
雪だるま何処まで行かば父母に逢はん
暮の春ほしほしと父母のこと
父母もめて炎の記憶五月果つ
父母の掌の中に手を七五三
どこまでも続く花蔭父母の墓
父母よりもはるかに生きてチューリップ
兩足を父母の家から出してゐる
曾祖父父母父母父母零余子飯
秋の夜や現世いとし父母遠く
お雑煮や父母のこのみしあはの餅
相寄れる父母の遺影に草餅を
表替へ父母以後は冬支度
柘榴割れ実のこぼれぬし父母の声
恙なく父母の揃ひて人学式
迎へ火や父母のきてぬし風と知る
父母祖父父母なし白瓜の雷干し
父母の写真磨けり彼岸まで
山法師花の白さや父母の墓
草臙父母連れ立ちてくるやうな
父母の面影遠し更衣
父母のこと姉しか知らず豆の飯
父母偲ぶ盆の団欒愚痴も出る

渡邊 友七

堀内 一郎

佐藤 恭子

芝宮須磨子

木村茂登子

芝 尚子

鈴木多枝子

佐藤 喜孝

篠田 純子

芝宮須磨子

芝 尚子

渡邊 友七

堀内 一郎

鈴木多枝子

赤座 典子

堀内 一郎

竹内 弘子

山莊 慶子

須賀 敏子

田中 藤穂

早崎 泰江

須賀 敏子

長崎 桂子

出来したと父母の顔大試験
夏霧や出で湯に沈む父母と
父母の写真仰ぎて彼岸かな
母の日に看経「父母恩重經」
父母もその父母も雛は識る
父母乗せて傾きみゆる茄子の馬
祝宴に祖父母の四人水引草
ひたぶるに父母恋し昭和の日
秋の雲父母なき家を流れゆく
姉に聞く父母のいろいろ墓洗ふ
蚕豆のはしりの食卓祖父母思ふ

不満

ハモニカは欲求不満冬の果
冴返るこの節々の不満足
独裁の不安と不満パリー祭

文

枯菊も共に焚くべし文ひとつ
冬桜言葉選みたる文送る
花だより日文矢文で北上す
田螺来る会ひたいといふ文入れて
みすずかる信濃は夏と恋文に
冬の街湿る切手の文もちて
尼寺の恋文塚の遅日かな

佐藤 恭子

佐藤 恭子

山莊 慶子

阿部 寒林

木村茂登子

秋川 泉

赤座 典子

田中 藤穂

秋川 泉

須賀 敏子

長崎 桂子

堀内 一郎

木村茂登子

田中 藤穂

後藤 志づ

齊藤 裕子

木村茂登子

鎌倉喜久恵

芝宮須磨子

佐藤 恭子

田中 藤穂

山眠る育てしものをふとこころに
雪をんな内懐に寒玉子
ふところに風あつまりりし天の川
廃校のふところさくら一列に
懐に春風入れて言ふことなし
春の雪とまどひ土のふところに
まんまるの月のかなしみふところに
ふところの瀬音冷えて芽木暮るる
早苗植う山懐の二人かな

後藤 志づ

田中 藤穂

堀内 一郎

堀内 一郎

鎌倉喜久恵

長崎 桂子

芝 尚子

渡邊 友七

赤座 典子

井上 石動

田中 藤穂

森山のりこ

鈴木多枝子

竹内 弘子

須賀 敏子

須賀 敏子

計報欄ちらと横眼に聖五月
剥がされさうな計報二月の掲示板
あつけなき計報ふたつや暮の春
読み返す計報フアックス洗ひ髪
立て込んで計報の届く秋の昼
椿落つ唐突にきく師の計報
計報なき町つつがなく夏送る
空半分鯖雲のあり計報あり
木枯一号計報一号もてきたる
金柑を焦してしまふ計報来し
計報また大輪椿紅曇る

計報欄になつかしき人朴の花
梶子の一輪咲いて友計報

父母

寒椿高き囲ひの父母の墓
亡き父母や木々に重たき雪の黙
亡き父母の来て左右に坐すところろ汁
父母眠る山河やさしく真夏日に
子鴉に父母ならぶさくらの実
暑に耐へて父母より多き齡生く
父母のこと鱒の小骨を抜きながら
父母に白百合の供花香を炷く
虫浄土父母の声かと耳すます

後藤 志づ

木村茂登子

堀内 一郎

赤座 典子

田中 藤穂

須賀 敏子

堀内 一郎

田中 藤穂

木村茂登子

大日向幸江

田中 藤穂

田中 藤穂

七郎衛門吉保

鈴木多枝子

渡邊 友七

田中 藤穂

芝宮須磨子

佐藤 恭子

田中 藤穂

竹内 弘子

長崎 桂子

渡邊 友七

あとがき

お礼

『あを』 作品の鑑賞を二年の長きにわたり赤座典子・七郎衛門吉保両氏に執筆していただいた。多忙の時や体調不良の時も休むことなく続けてくださった。会員の作句の励みに大いになった。お礼申しあげます。次の担当者は未定、今は二月号の事だけ考へてゐる。

俳句を読むとき、基本的には人と時代を外して読む。さう読みたいと思つて読む。俳諧・俳句そのものだけを読むやうにしてゐる。時代背景や作者の人生を思ひながら読むときも勿論あるが基本的にはさういふことである。古俳諧も解説も最小限にとどめる。作る時もそのことをどこかで意識して詠む。句の種を拾つても育てるのに時間がかかる。若いときは何年もかけた句もあった。出来上がると『あを』で発表する。四季折々の句が並ぶことと相成る。残余の時間が少ないのでせつかちになつてゐて適当な季節まで待ちきれない。ひところ「自己責任」といふ他人を攻撃する言葉として使はれた。発表方法など『あを』では自由、ま

さに「自己責任」と責任をもつて発表されたい。

『暖流』の旗印に「十七音基準律、無季容認」とあつた。私は俳句で縛られるのを嫌つて『暖流』を選んだ。入会当時は有季定型で作つてゐたが、将来までの自分を信じられなかつたので。当時の私はいろいろな意味で勝手に縛られてゐた。俳句はそれへの反動であつたのかもしれない。『暖流』を選ぶとき『萬緑』も考へたが、当時遅刊続きだつた『萬緑』は初心者の私には合はぬと外した。
(喜孝)

二〇二一年二月号

発行日 二月十九日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

竹僊房

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)